

聖書：第二サムエル記8章1～8節

説教：奪い取るダビデ

## 1 戦争と平和の間

### 1) 戦争という現実

今日の箇所では戦争のことが書かれています。誤魔化さずに言えば、ダビデは人を殺しています。ここを読んで、どこに神の恵みがあるのか。そう言いたくなる箇所です。

前回まで、7章を見ていきました。そこには、主が、ダビデの家をとこしえに祝福すると、ダビデに約束したことが書かれていました。ダビデは体が震えるほどの感動をもってこれを聞きました。

けれども、目の前の現実はどうでしょうか。問題は山積みなのです。具体的に言えば、イスラエルの周りには、いろいろな敵がひしめいて、少しでもすきを見れば、敵は攻め込もうとしている。そんな状態でした。祝福の約束はいただきましたが、目の前の現実はなお厳しいまま。そこから目をそむけることはできません。もし目をそらすなら、イスラエルは滅び、ダビデのいのちもありません。ダビデは、イスラエルを守るために戦わなければなりません。

### 2) 「平和をつくる者は幸いです」

でも、それで納得できるでしょうか。イスラエルが神に選ばれた民であることはそのとおりです。けれども、そのイスラエルを守るためには、他の国の人々はどうなってもよいのか。6節の後半に、「こうして主は、ダビデの行く先々で、彼に勝利を与えられた」とあるのを読み、複雑な気持ちになります。神は戦争を好む方なののでしょうか。

有名な山上の説教の中に、「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから」とあります。イエスは、「あなたの敵を愛しなさい」とも言われたのではないか。そのみことばと矛盾しているように見えます。これをどう考えたらよいのか。きょうはそこに焦点を当てていきます。

## 2 戦争

### 1) 敵と戦うために立てられた王

ダビデは信仰者です。そのダビデがどうして戦争に出かけて行くのか。素朴ですが、重い疑問が出て来ます。そのことを考えるためには、そもそもイスラエルが、どうして王様を立てるようになったのか。それを見なければなりません。

もともとイスラエルには王はいませんでした。ところが、なんどもペリシテ人に襲われるようになり、財産が奪われ、同胞が殺されるという事件が続いて起きるようになります。イスラエルの長老たちは相談し、その結果、イスラエルにも王様を与えてほしいと神に願うことにします。王の役割ははっきりと決まっていました。自分たちに代わって敵と戦う。そういう王様です。神は最初これに強く反対します。けれども、長老たちの熱心な願いを聞き入れ、神は条件付きで同意します。そうやってサウルが最初の王となり、今ダビデが王となっています。

これでおわかりのとおり、イスラエル王は、最初から大きな義務を背負っているのです。王は、戦いの最前線に出て行き、人々の

期待を一身に背負って、敵と戦い、イスラエルを守る。それがイスラエル王に課せられた使命です。ダビデは、主から油を注がれ、王として選ばれてしまいました。選ばれた以上、ダビデもこの使命から逃れられません。どんなに心の中で戦争はいやだと叫んでも、戦うしかありません。それがダビデの置かれていた立場でした。

## 2) 主の御思いは

では神は、このことをどうご覧になっていたのか。次にそのことを考えます。6節後半に、「こうして主は、ダビデの行く先々で、彼に勝利を与えられた」とあります。神は、イスラエルが戦いに勝つことにだけに喜びを感じ、ほかの人たちのことはどうでもよいと思っていたのか。ここだけを読むと、主の御思いがわからなくなります。

主は、戦争というものに対してどのような思いをもっておられたのか、そのことをはっきりと示している箇所があります。まだダビデが、サウルの息子イシュ・ボシェテとの間で王座を巡って争っていたときのことです。ダビデの将軍ヨアブとイシュ・ボシェテの将軍アブネルが直接対決をするという場面になったとき、アブネルはこう言ったのです。

「いつまでも剣が人を滅ぼしてよいものか。その果ては、ひどいことになるのを知らないのか。」(第二サムエル2章26節)

主はアブネルの口を通して、ご自身の御思いを語りました。戦争は人を滅ぼすことになる。ひどい結果しかもたらさない。これが主の御思いです。この御思いは、どんなに世界情勢が変化しようが、時代が移り変わろうが変わることはありません。

## 3) 戦争の責任

神は、ゲームのように戦争を楽しんでいるのではなかった。そのことはわかりました。でもそれならどうして、神は戦争を止めさせないのでしょうか。そう思いませんか。

先週も、私たちの耳にさまざまな戦争のニュースが聞こえてきました。イスラエルの軍隊がガザ地区に展開しています。ウクライナでは民間機が打ち落とされました。「戦争はいやだ」と言っても、戦争が繰り返されています。神はどうして戦争を止めないのでしょうか。神は私たちを愛していると言うのなら、神は何かすべきではないのか。けれども何もしない。それを見て、神はいないのだという方がいます。神に対して強い憎しみをぶつける方もいます。

間違っただけではありません。戦争が起きるのは誰に責任があるのですか。私たちは、何かひどいことが起きると、その原因はすべて神にあるように考えがちです。神に責任があるのでしょうか。いいえ。私たちの先祖アダムとエバが神に背いて罪を犯したとき、何か起きましたか。神に質問されたアダムは、自分が負うべき罪の責任を神に押しつけ、妻であるエバに押しつけました。その日以来、人とは憎しみあうようになりました。その罪が私たちの中に脈々と受け継がれています。たとえ夫婦であろうが、親子であろうが、兄弟であろうが、心の中で憎み合い、殺している。それが私たちではないですか。それは神の責任なのですか。いいえ、私たちの罪の結果です。私たちの責任です。人を赦すことができず、憎み合う。その結果、戦争が繰り返されています。

## 3 奪い取るダビデ

## 1) ダビデが受け取った代償

神はどうされるのでしょうか。今日の箇所では一見、何もされていないように見えます。むしろ、ダビデが戦いによって血を流し、人を殺していくことを後押ししているようにさえ見えます。けれども、主がダビデのことをどのように見ていたのか、第一歴代誌22章8節にはっきりと示されています。「ある時、私に次のような主のことばがあった。『あなたは多くの血を流し、大きな戦いをしてきた。あなたはわたしの名のために家を建ててはならない。あなたは、わたしの前に多くの血を流してきたからである。』」

ダビデは、イスラエルを敵の手から守ることが期待され、王となりました。その使命を果たすために一生懸命がんばり、大きな成果を上げることができました。神もダビデを守り、勝利を与えてくれました。その結果、どうなったか。ダビデは信仰者として神殿を建てたいと強く願っていたながら、建てることのできない、資格がないと言われてしまうのです。主のために一生懸命働いた結果、いただいた報酬がこれです。こんな話があつていいのでしょうか。屈辱的な扱いではないですか。ダビデは大きな犠牲を強いられたことになります。

## 2) 傷を受けたままよみがえられたみからだ

では神は何も犠牲を払わなかったのでしょうか。いいえ。そうではありません。今日の箇所でダビデが敵の手から多くのものを奪い取ったことが書かれていることにお気づきでしょうか。あるときは町を奪い、貢ぎ物を納めさせ、戦車や馬を奪い、金や青銅を奪い取っています。いったい何のために奪うのでしょうか。国の財産を増やすためですか。

宮殿を立派に飾るためですか。いいえ。神殿を建てるためです。神殿の材料とするものを集めているのです。先ほども触れたとおり、自分の手では建てることはできません。神殿建設事業はソロモンに託されていきます。事実、ソロモンはこのあと、ダビデが集めた材料を使って神殿を建てていきます。では、ただ建物としての神殿を建てるために、敵から多くの金銀財宝を集めたというのでしょうか。

そうではありません。ダビデが見ているのはもっと先のことです。主の約束はこうでした。7章13節。「彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」「彼」とはソロモンのことですが、やがて来られる主イエスキリストをも指します。主が建ててくださる一つの家。それは、主ご自身のよみがえられたみからだであることを、主ご自身が教えてくださいました。

そうしますと、ダビデは何をしていたことになるのか。ダビデが、敵の手から奪ってきた金銀。そのことと主のみからだがつながっています。ダビデが敵から奪い取る。救いとなんの関係もないように見えたのですが、一つの糸でつながっていました。主のみからだは何によって形づくられていったのか。イスラエルのなかにあつたものではありません。イスラエルの敵がもっていたものが使われました。それによって主のみからだがつてられたのです。

主は墓の穴から三日目によみがえられました。主のみからだはどのようなものでしたか。トマスが目撃しました。手に釘のあとがありました。脇腹に大きな傷が口を開けていました。だれがそうしたのか。私たちです。

私たちの憎しみ、罪が、主のみからだに顔をそむけたくなるようなむごたらしい傷をつけたのです。主はその傷を残したまま、よみがえられました。このことがどんなに大切な意味をもっているのか、忘れてはなりません。私たちはこの方の敵でした。けれども、この方は私たちがもっている罪を私たちの手から奪い取り、ご自分のみからだの傷として負ってくださり、主の栄光の神殿の材料としてくださったのです。

主のみわざの奥深さにただ感謝するばかりです。